

二〇〇九年度

中等部入学試験問題

国語(60分間)

【注意】

1. 問題は、一と二です。
2. 解答は、すべて別紙の解答用紙に記入しなさい。

【注意】 受験番号は、算用数字で横書きにすること。

受 験 番 号				

氏 名

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

姉ちゃんにだけは座敷わらしのことを話そうか。でも、どう言えはいい？ 最近、姉ちゃんとはあんまり話をしていない。智也が話しかけても、うるさそうにするだけだからだ。話しかけ方を忘れてしまった。

前の家で、アコーディオンカーテンにそうしていたように、障子をノックした。何度もガンガン叩いた後、ようやく顔の幅だけ障子が開いて、姉ちゃんが首を突き出してきた。

機嫌は悪くなさそう。障子のすき間に浮かんだ顔が、音楽に合わせてくりくり動いている。

くりくりが止まってしまった。

姉ちゃんは思いっきり顔をしかめて、智也の言葉を吹き飛ばそうとするみたいに首を振る。

違うと思う。そう信じた方が怖くなるから、そう思いこんでいるだけだ。姉ちゃんが、ふふんと鼻の音だけで笑った。

なんだか声が弾んでる。機嫌がいい理由がわかった。「姉ちゃんがいなくて寂しい？」と聞かれた時に、智也が頷いてしまったからだ。自分がいないと困る人間がいることが、嬉しくてしかたないって感じ。本当はちよつと違うんだだけ。

さつき父さんから電話があった。運転代行というので帰ってくるらしい。「ウンレンライコウ？」母さんが何度も聞き返したほど酔っぱらって。

姉ちゃんがまた、ふふんと笑った。

悔しい。でも、嬉しい。

CDコンボが消え、姉ちゃんが出ていったとたん、二階は静まり返った。目覚まし時計の針の、誰かの舌打ちに聞こえる音が耳を刺すほど。

雨がフツフツと降っていることに、初めて気づいた。雫が細長い虫みだに窓を這っている。窓枠に置いたけん玉が目に入ったとたん、テレビ番組で頭をいっばいにして忘れようとしていた、あの子ども——座敷わらしの姿を思い出してしまった。

智也の想像の中の座敷わらしは、物凄い形相をしている。パニパニ☆モンスターに出てくる、吸血小鬼グリムンのようだ。グリムンを知らない人のために説明すると、(コウモリ+チンパンジー+吠えかかるフレンチブルドッグ)÷3という感じ。かえってわかりにくいかもしれないが、とにかく恐ろしい顔だ。

座敷わらしは、普通は家の中にしかない、とカッチャン(注 智也の友達)は言っていた。勝手に外へ連れ出した智也のことを怒っているに違いない。しかもその智也は、座敷わらしをほっぽり出して、自分だけサッカーの仲間に入っ

A

て、ひとりぼっちにさせてしまったのだ。きつとブツブツ級の怒り。智也だって同じことをされたら、そうなる。雨が強くなってきた。屋根を叩く雨音が、智也の心臓も叩いた。けん玉は座敷わらしの物かもしれない。横取りしたうえに、偉そうに「教えてあげる」なんて言ってしまった。そのことも怒りをさらに酷くしている気がした。

けん玉、返そう。祠の前に置いてくれば、怒りが静まるかもしれない。けん玉を手を取ったとたん、グリムンみたいに牙を剥いた座敷わらしが、祠から飛び出してくる光景が頭に浮かんだ。いや、夜はやめよう。明日、明るくなつてからだ。

階段から足音が聞こえはじめた。

と、と、と。

ようやく姉ちゃんが戻ってきた。ふとんを抱えているせいか、やけにゆっくりした足取りだ。

と、と、と。

のけて立ち上がる。襖を開けた瞬間、姉ちゃんの声が聞こえた。

襖の向こう側からではなく、一階から。テレビを見て笑っている声だ。

え？

智也は襖の先の色あせた壁を見つめて、いま聞いた足音のことを考えていた。聞き間違いであるはずはなかった。というこは——

家族の中でいちばん小さい智也は、ふだん視線を上向きにしていることが多い。いまもそうだった。首が下を向くの嫌がついている。でも

1

が動いてしまった。

ぼん。床が鳴った。

2

の力が抜けて、手からけん玉がすべり落ちたのだ。智也には心臓がパンクした音に聞こえた。

部屋の中へ後ずさりした。何歩目かで漫画本につまずいて、尻もちをついてしまった。本当に驚いた時には、声って出ないものだ。大きく開けているのに、口からは空気漏れみたいな声しか出てこなかった。本当に心臓がパンクしてしまったのかもしれない。

一階からテレビの音が聞こえてくる。ふとんを取ってくるはずの姉ちゃんが道草をして、ギャハハと笑っている声も。智也にはそれが、何百メートルも先で起きている出来事に思えた。

C

、目の前に座敷わらしが立っているのだ。

座敷わらしはけん玉を拾い上げて、細い両手で大切に抱えた。やつぱり取り戻しに来たんだ。それ、返すから、許して。こっちに来ないで。頭の中ではそんなせりふが駆けめぐっているのに、言葉がなかなか出てこない。ようやく唇からこぼれ出たのは、小さな震え声だけだった。

「……ごめん」

タク君(注 近所に住む幼児)だと信じこんでいた時、最初に言おうと思っていた言葉だ。ばくが悪かった。だから、血を吸うのはかんべんして。座敷わらしは、何も答えない。じつと智也を見つめ返してくるだけだ。

「……1」

敬語にしてみた。座敷わらしが目をぱちぱちさせる。なぜ智也が驚いているのか、自分にアヤマっているのか、よくわからないって顔で。茶運び人形みたいな足取りで近づいてくる。智也は尻もちをついたまま、ずりずりと後ずさりした。

握り締めていたけん玉を、智也の顔の前に突き出してきた。いつも何かに驚いているような丸い目がきらきらしている。

「え？」

受け取れって言っているらしかった。とんでもない。ぶるんと首を振ると、このあいだみたいに指で玉をつまみ、目を寄り目にして、大仕事をしているような緊張した手つきで、けん玉に刺した。それをまた差し出してくる。

「2」

「3」

玉みたいに光る目で、じーっとけん玉を見つめていた。

座敷わらしは両手を握り拳にして、ビー

(萩原浩「愛しの座敷わらし」より)

問1 線①「フって」、③「アヤマって」のカタカナを漢字に直し、②「形相」の読み方をひらがなで答えなさい。

問2 「1」～「8」に入るのにもっともふさわしい会話を、次のア～クから選び、記号で答えなさい。ただし、1、5、6、7、8には姉のことばが、2、3、4には智也のことばが入る。

ア「もうその話はしないでよ。そんなもの見てない。あれは目の錯覚」

イ「なに？」

ウ「じゃあ、今日はこっちに来てあげるよ。あつちの部屋は、お酒臭いだろうし」

エ「幽霊を見たって言ったでしょ」

オ「そうか、智也、怖くて眠れないんだろ。姉ちゃんがいないから」

カ「あのさ、聞きたいことがあるんだ」

キ「待つてな、ふとん持つてくるから」

ク「どんな顔だった」

問3 線1「障子のすき間に浮かんだ顔」とあるが、なぜそのように見えたのか。次の文の1、3に当てはまることばを、文中からぬき出さない。

1 が 2 を開いて、 3 いるから。

問4 線2「本当はちょっと違うんだけど」とあるが、何が違うのか。次の文の□に当てはまることばを、指定の字数で文中からぬき出さない（句読点などの記号も一字とする。以下の問いも同じ）。

1 十字以上十五字以内 2 五字以内 3 五字以内

問5 1、2に入るのにもっともふさわしいことばを、それぞれ次のア～クから選び、記号で答えなさい。

ア 顔 イ 目 ウ 鼻 エ 口 オ 歯 カ 肩 キ 指 ク 足

問6 A、Cに入るのにもっともふさわしいことばを、次のア～キから選び、記号で答えなさい。ただし、同じことばが二か所に入ることはない。

ア しかも イ なにしろ ウ まったく エ いや オ だから カ それなのに キ わざと

問7 この文章から、次の一文をぬいてある。どこに入ればよいか。この文が入る個所の直後の一文をぬき出し、その最初の三字を答えなさい。

すぐそこに、座敷わらしが立っていた。

問8 線3「え？」とあるが、なぜそう思ったのか。次の文の1、3に当てはまることばを、文中からぬき出さない。

1 が 2 にいると思っていたのに、 3 にいることが分かったから。

問9 線4「……ごめん」につながるのにもっともふさわしいことばを、(1)に入れない。

問10 智也の不安でたまらない気持ちを、擬人法を用いて表現した一文がある。線3より前の部分からぬき出し、その最初の三字を答えなさい。

問11 智也の恐怖心の大きさを表すのに用いられた比喩表現を二つ、線3より後の部分から、どちらも八字以上十字以内でぬき出さない。

問12 線5「ばくが悪かった」とあるが、以前、智也は座敷わらしに対して何かをしただけか、次の□に当てはまることばを文中からぬき出し、2点答えなさい。ただし、指定の字数に従うこと。また、2と4は、それぞれ最初の三字を答えること。

1点目 座敷わらしを 1 八字以上十字以内、 2 十字以上十五字以内

2点目 3 五字以内を 4 三十以上三十五字以内

問13 2、3に入るのにもっともふさわしいことばを、次のア～オから選び、記号で答えなさい。また、(3)に入るのにもっともふさわしいことばを、カ～コから選び、記号で答えなさい。

ア「……けん玉をあげる……ってこと？」

イ「……けん玉をしまえ……ってこと？」

ウ「……けん玉をやれ……ってこと？」

エ「……けん玉を直せ……ってこと？」

オ「……けん玉を返せ……ってこと？」

カ それで許してくれるなら。おそろおそろ受け取り、立ち上がった基本の構えをする。キ わかった、そうするよ。ばくはそれを押入れの前に持っていく、そつと中に入る。ク 取ったつもりはなかったんだ。このけん玉が彼のものとはほんとうに知らなかった。ケ ばくがこわしたんじゃないんだよ。たしかにけん玉は最初からそういう状態だった。コ でもそれは、君のものではないはずだよ。落っこちていたのをひろっただけだもの。

問14 本文の内容に合うものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 座敷わらしの方が智也を恐れていると気付く、智也は余裕を取り戻した。
イ 座敷わらしに許してもらったために、智也は言いなりになるほかなかった。
ウ 座敷わらしは智也をおどそうとしたが、智也は落ち着いて対応している。
エ 座敷わらしが不気味でたまらず、智也は逃げるのもままならないでいる。
オ 座敷わらしの意外な行動に、智也はとまどいつつも応じようとしている。

問15 座敷わらしは、東北地方の民話に登場する。東北地方出身の作家を一人、次のア～オから選び、記号で答えなさい。また、その代表作をカ～コから選び、記号で答えなさい。

ア 樋口一葉 イ 森鷗外 ウ 夏目漱石 エ 宮沢賢治 オ 川端康成
カ 伊豆の踊子 キ たけくらべ ク 坊っちゃん ケ 山椒大夫 コ 注文の多い料理店

人は、ロビンソン・クルーソーのように無人島で一人ぼっちで暮らしていても社会のなかにいる。まず、彼には習得した言語があり、言葉による記憶がある。これから逃れて、彼は一日も生きられない。眠って夢を見てさえ、言語のなかにいる。彼はいつも何かしらの考える。その考えが自分に分るには、他人に分かる言葉で考えなくてはならない。自分が話すところを、自分が聞く。二人の（自分の）間にあるこの距離は、すでにひとつの人間関係で占められている。批判したり、嘘をついたり、機嫌をとったり、言いくるめたりする相手は、すでに自分のなかにいる。こういう動物は、人間だけだろう。

言語を持った人間は、絶えず自分を説得するという重荷を負わされている。こっそり万引きした人は、万引きしたことと自分を説得する。どんな無邪気な者でも、それはやっている。汚職（地位や権力を利用して、不正なことをすること）した政治家は、そのことで自分の機嫌をうまく取らなければ、ああ偉そうにはしていられない。動物は、こんなことをしなくてよい。獲物を横取りするハイエナは、ただ横取りするだけであって、彼の意識は、その時々にする行為への注意だけでいっぱいになっているだろう。怒る時は、彼のすべてが怒っている。寛いで寝そべっている時は、そのすべてが寛いで寝そべっている。ハイエナが怒るのではなく、その怒りが全部ハイエナになって爆発しているように見える。

こういう無駄のなかに、何か私たちが惚れ惚れさせるものがある。私たちが怒る時は、怒っている自分をけしけたり、なだめたり、恥じたりしているいろいろな自分がいて、私たちは複雑たがざるをえない。我を忘れて、というのは、たまたまそういう言葉であって、よくよく思い返せばそんな事実はめったにありそうにない。人間は自分自身と何らかの関係を結ばずには、片時もいられないものである。この関係が、また他の関係（つまり他人）と関係を結ぶ。言葉によって、あるいはいろいろな記号や貨幣によって。こうして出来上がる複雑さは、わかつてはいても常に想像を絶する。

この意味では、動物の群れには、ほとんど関係というものはないとと言える。彼らに起こるのは、結びついたり争ったりを通しての群れ全体の純然たる力の配分だとも言える。人間だけが、言語や記号による関係の抽象性を生きている。そのことが、人間に計り知れない重荷を負わせている。私たちの心は、大変なのである。

ところで、傍若無人という言葉がある。文字通り、かたわらに人無きが若し、という意味である。私たちは、物語のなかではこういう主人公をしばしば愛好するけれど、その辺の他人がこれでは困る、身近な友人や家族ではもっと困る。ジョン・ウェイン（映画俳優の名前）の牧場主みたいなのが、親兄弟では困るのである。実際困っている様を、ジョン・フォードやハワード・ホークス（映画監督の名前）はちゃんと描いた。人間は、そんな具合に生まれついているから。物語のなかで、主人公の傍若無人が好まれるのは、私たちが自分をそこに投影するからだろう。従って、自分一人が傍若無人分には結構である。そんな自分をみんなが素敵だと思ひ、受け容れてくれるのが一番いい。

物語は、その種のフィクションをいくらかでも作り出せる。私たちの願望がそこにある限り、物語はそれに応えて、傍若無人の主人公を描いてみせる。傍若無人は、私たちの願望が生んだフィクションに過ぎない。だから、誰もこの通りを真似たりはしないだろう。現実には、傍若無人と見える人は、自分をうまく説得できない不器用な人である。自分が

1 にとつて何であるかを、2 にわからせることができない。

この不器用さは、たいていの場合、家族やそれに類する仲間の無制限な好意から抜け出せないために起こっている。自分を説得できない者が、他人を説得できるはずはない、他人から説得されるはずもない。そこでいよいよ他人のことは眼中にない、といった風になる。これは、困った子供に違いないが、この人を人並みに器用にするのは簡単であろう。赤の他人の無関心に放り込めばいい。しかし、そこにも家族に類する仲間が生まれれば、この人の不器用は、ますます迷惑な病気になる。

殺人者であれ、泥棒であれ、人は何とかして自分と折り合いをつけようとする。人間が、この二重になった自分から逃れることはできない。この二重性は、社会性と同じことである。自分にどう言い聞かせるかは、社会のなかで自分はどう選ぶかと同じになるだろう。人は、この選択から逃れられない。

子供時代の私の剣道の先生は、剣道をする者であることを選べと教えた。そうすれば、剣道をしない者一般に対する

責任が生じる、それを黙って負えと教えた。この道徳教育はなかなか巧妙である。選べと命令しながら、選んだのは、お前の自由意志からだと言っている。自由を選んだと言いながら、そこから生じる責任を負えと命令している。命令、自由、責任が切り離せない鎖になって、道徳の論理を成り立たせている。だが、この論理の連鎖は、それを連鎖させ、作動させる元の力がなかったら、ひとつの奇怪な説教でしかないだろう。

命令された選択が、自由意志と同じになり、自由意志による行動が、他人に責任を負うことと同じになるためには、何が必要か。まず、その命令が、自分による自分への命令であることが必要だ。先生は子供に選べと命令するのはない、**3** ことを **4** に命令せよと **5**。すると子供は、自分に命令するようになる。なぜか。倫理（人のふみおこなうべき道）の根本問題は、どうもこの辺に在るようである。

自分に命令する、ということが人間にはできる。私たちは、どんな時でももう一人の自分に付きまとわれ、この自分を説得しないことにはどうにもならない。不機嫌の風に見舞われる。説得は、まるで社会のなかの他人に向かつてのようになされる。私たちの心は、自分自身のこの社会性から逃れて生きることができない。この時、説得するのでなく、命令する、というもうひとつの態度が人間には可能である。

それは、どんな命令か。人を殺せ、物を盗め、自分だけが得をしろ、という命令か。そうだとしてみよう。そういう命令が可能だとしてみよう。人は、その命令に従った自分について、また何や彼やともう一人の自分に言い聞かせるはめになる。そうすれば、人は自由ではなくなるだろう。自由意志に従っているとは言えなくなるだろう。言い聞かせるはめになるのは、良心があるからか？ そう考えてもよいが、事実はもつと決まっていたことだ。言い聞かせる相手が、そのもう一人の自分が、殺される他人、盗まれる他人、騙される他人になって、こちらを見返してくるからである。それが、社会を裏切るといことだろう。社会は、私たちの外側と内側に同時にある。内側と思つたものは外にあり、外側と思つたものは内にある。

自分への命令が、完全に自由意志によって為されるためには、その命令は社会を裏切るものであってはならない。裏切るところか、それへの責任を新たに生まれさせるような命令でなくてはならない。この命令は、社会のなかの他人に命令するような具合に為されるだろうか。そんなことはない。なぜならこの時、人はもう一人の自分に対して機嫌を取る必要が少しもないから。命令は、まさにほかでもない自分自身に対して、どんな言い訳もなしに為される。自分と自分の二重性は、ここでは分裂を起こさない。命令を実行する行動の充実のなかで統一される。それが、自由ということだ。

動物の行動にある無反省、私たちが時として惚れ惚れする無反省は、こうした自由とは違う。自由には、自分自身に対して為される命令があり、命令する自分とされる自分の行動による統一がある。命令による行動がなくなれば、この統一はまた最初の分裂に戻るだろう。殺す、殺さない、盗む、盗まないの葛藤（いがみ合い）に戻るだろう。

命令は、どんな風に起こつてくるだろう。ゴッホ（十九世紀の画家）は、ポリナージュ（地名）のタンコウに行つて、そこで働く貧しい人たちのためになろうとした。自分の食べ物も、着る物も与えた。そうせよ、と彼は自分に命令した。人間の生存の根っこから倫理の原液を吸い上げた人の自分への命令は、たとえばこういうものになる。しかし、間違えないようにしよう。これは禁欲（何かをしたいという気持ちをおさえること）する、苦行に耐える、というようなこととはまるで違う。ゴッホには、こうせよという自分への命令と、こうした自分への命令とが、決して区別のつかないものとしてやって来た。彼の手紙を読めば、それはありありとわかる。

命令は、それ自体欲求と同じものでなかつたら力を持たない。欲求は、それ自体自由意志による命令と同じものになるのでなかつたら、倫理とはならない。欲求に強さの度合があるように、倫理にもまた強さの度合がある。人が、ゴッホのような倫理の欲求に捉えられることはまずない。けれども、自由意志による自分への命令が為されるところ、必ず何らかの度合によるこの欲求がある。私たちは、電車で他人に座席を譲る。路上で倒れ込んでいる病人を抱き起こす。大地震の被災地に幾らかの義援金を送る。驚くくらい多くの人が、私たちは、現にそうしたくて、そうしたのである。その欲求の根の根まで降りて行つてみよう。ゴッホが吸い上げたのと同じ原液が、そこにあるだろう。

（前田英樹『倫理という力』より）

問1 — 線①「タンコウ」のカタカナを漢字に直し、②「苦行」の読み方をひらがなで答えなさい。

問2 — 線(1)「複雑たらざるをえない」、(2)「想像を絶する」の意味としてもっともふさわしいものをそれぞれ次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- (1)「複雑たらざるをえない」
- ア 必ずしも複雑ではないこと
 - イ どうしても複雑になること
 - ウ 複雑さに満足していること
 - エ 複雑過ぎるように見えること
 - オ 複雑さをがまんすること
- (2)「想像を絶する」
- ア 程度がはなはだしいこと
 - イ 考えたくなること
 - ウ 力が十分におよばないこと
 - エ 思い過ぎにすぎないこと
 - オ 思いやりに欠けること

問3 — 線1「社会のなかにいる」とあるが、この場合の「社会」とはどのようなことか。その説明としてふさわしいものを次のア～オから二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 一人ぼっちになったのは一時的なことで、長い目で見れば一つの集団の中にいると考えられることを「社会」と表現している。
- イ 自分は一人ぼっちだと思っても、世界には同じような状態にある人がたくさんいることを「社会」と表現している。
- ウ 一人ぼっちになってしまったというさびしい気持ちを表した言葉は、実は他人を求めているものであることを「社会」と表現している。
- エ 一人ぼっちだという言葉は他人にも理解してもらえない点で、他人や外部とつながりがあることを「社会」と表現している。
- オ 自分は一人ぼっちだなどと思うときの、自分が自分自身に声をかけている、自分の中の関係のことを「社会」と表現している。

問4 — 線2「眠って夢を見てさえ、言語のなかにいる」とはどのようなことか。その説明としてもっともふさわしいものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 夢は自分の内部に起こることであり、言語の仕組みと大変よく似ているということ。
- イ 夢の中のさまざまな出来事を理解するには言語というものが必要であるということ。
- ウ 夢を見ながらこれは夢だなと気づく人間だけが言語を操ることができるということ。
- エ 夢の内容をできるだけ正確に他人に話すときには必ず言語が必要になるということ。
- オ 夢の中でも他人にわかる言葉で話さないと、社会とつながりがもてないということ。

問5 — 線3「万引きしたこと自分で説得する」とはどういうことか。その説明としてもっともふさわしいものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 万引きした理由を自分の中できたと説明して認めようとする。
- イ 万引きすることみじめで貧しい自分の状態をなくさめようとする。
- ウ 万引きという罪を二度と犯すことがないように自分に言い聞かせる。
- エ 万引き事件の経過を自分にも他人にも言葉で説明できるようにすること。
- オ 万引きした事情を他人に伝えて自分の重荷を軽くしようとする。

問6 — 線4「そんな事実」とはどのようなものか。次の文の□を文中の言葉を使って補い、答えなさい。

□こと。

問7 — 線5「何らかの関係」とあるが、この「関係」の一つの例である次の四字熟語の、□に入る漢字を後のア～クからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

自 A 自 B

- ア 答
- イ 給
- ウ 由
- エ 在
- オ 問
- カ 足
- キ 己
- ク 立

問8 — 線6「私たちの心は、大変なのである」のはなぜか。その理由としてもっともふさわしいものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 見えにくい他人の心の中も言葉を使えば十分にわかるようになるから。
- イ 親しければ親しいほど関係の作り方はかえってむずかしくなるものだから。
- ウ 家族や親しい友人以外の人間関係にはあいまいさがつきものであるから。
- エ 言葉や態度が表す意味をきちんと読み取り行動しなくてはならないから。
- オ 言語や記号をうまく使いこなすには大変な努力と時間が必要であるから。

問9 — 線7「かたわらに人無きが若し」とはどのような意味か。次の文の□に入る十一文字の語句を——線7より後の部分からぬき出して答えなさい。

□こと。

問10 — 線8「自分」とはどのようなものか。もっともふさわしいものを次のア～ウから選び、記号で答えなさい。

- ア 現実の自分
- イ 自分の中の他人
- ウ 自分の願望
- エ 自分の強さ
- オ 自分自身への気配り

問11 — 線9「自分」に入る語の組み合わせとしてもっともふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 1 自分 2 自分
- イ 1 自分 2 他人
- ウ 1 他人 2 自分
- エ 1 他人 2 他人

問12 — 線9「自分」にどう言い聞かせるかは、社会のなかで自分をどう選ぶかと同じになるだろう」とはどのようなことか。その説明としてもっともふさわしいものを次のア～ウから選び、記号で答えなさい。

- ア 自分との争いを避けることが社会生活を無事に送る大切な要素であるということ。
- イ 自分が納得することによって初めて困難な道を選ぶ勇気が生まれるということ。
- ウ 自分を説得する技術は社会生活において大いに役に立つものであるということ。
- エ 自分との対話の体験によって社会における生き方も充実したものになるということ。
- オ 自分との折り合いのつけ方によってその人の行動が決まってくるということ。

問13 — 線10「3・4は二字、5は四字の語が入る。」に入るのにふさわしい語をそれぞれ文中からぬき出しなさい(3・4は二字、5は四字の語が入る)。

3 5

問14 —線10「社会は、私たちの外側と内側に同時にある」とあるが、「社会」が「内側」に「ある」とはどういうことか。次の文の [] に文中から七字の語句をぬき出して答えなさい。

まるで他人に対するように、自分のなかにいる [] を説得することが必要な場合があること。

問15 —線11「動物の行動にある無反省」とはどういうことか。その説明としてもつともふさわしいものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 怒っている自分を自分でけしかけたりなだめたりすること。
- イ ほかの動物の獲物を横取りしようと考えたこと。
- ウ 命令する自分とされる自分の行動による統一がないこと。
- エ 自分の行為への注意だけに意識が常に集中していること。
- オ 命令のほとんどが自由意志によってなされていること。

問16 〰〰〰線「元の力」について述べた次の文章の [A] [D] に入る語を〰〰〰線より後の部分からぬき出しなさい（同じ記号には同じ語が入る。A・Cは二字、Bは三字、Dは五字の語が入る）。

[A] に対する命令が自由意志によって為されるとき、自分の中の [B] は他人に対する責任をともなう行動によって統一されている。自由意志による命令は本人の [C] と一致したときはじめて倫理というものになる。倫理の [C] の根にはゴッホの例にあるように [D] と表現されるものがあり、これは、多くの人の [C] の根にも存在しているはずである。「元の力」とは、この [D] のことにほかならない。

〔以下 余 白〕